

近代日蓮教団における従軍僧の活動について

安 中 尚 史

天津条約にもとづいて日本も出兵し、明治二十七年七月、豊島沖海戦で戦鬪の火ぶたが切り落とされた。

近代日蓮教団における従軍僧の活動について、日清戦争期における日蓮教団の従軍僧を、その活動の基となった日蓮宗報告義会の動向もふくめて考察していきたい。

日蓮教団における従軍僧の動向を考察するにあたり、まず見ていかなければいけないものに、日蓮宗報告義会という組織がある。この日蓮宗報国義会とは、明治二十七年七月に勃発した日清戦争を支援する目的で、日蓮宗寺院有志が組織し、活動は全国的に展開した。その活動内容は、国内における戦勝祈禱から、義捐金を集めたり、また戦地にまで直接おもむいて布教する、従軍布教僧の派遣までおこなわれ、当時の国内情勢を反映した活動を行っていた。⁽¹⁾

この日清戦争とは、朝鮮に対して、進出をはかる日本と、朝鮮の宗主権を主張する清国との間で起こったもので、東学党の乱をきっかけとして、清が朝鮮に出兵したことに対し、

当時の日本国内の情勢は、凶作による小作問題・農民問題が起こり、資本主義経済にも破綻が生じはじめ、また開国時に結んだ不平等条約について、政府の対外国政策に不満が生じていた。その中で日清戦争の戦勝による国内の経済効果や、欧米列強をはじめとする諸外国に対しての立場に、有利をもたらす事が出来ると考え、報国機運が発揚していた。

また他の仏教団でも戦地への慰問使節の派遣を積極的に行い、従軍布教の派遣を軍部に懇願していた。そしてこれは仏教団に限ったことではなく、日清戦争勃発時にキリスト教各派の有志によって、大阪ではキリスト教同志会、広島ではキリスト教徒同盟戦時軍人慰安会、東京でもキリスト教同志会という名でそれぞれ組織され、国民精神を鼓舞するために地方に弁士を派遣し、また戦地への慰問使節の派遣を決めていた。⁽²⁾

このような中、明治二十七年七月二十九日、日蓮宗臨時報國義会が組織された。そして池上本門寺貫首の鷗溪日舜が会長に、真間弘法寺貫首の梨羽日環が副会長にそれぞれ就き、本部を小伝馬町祖師堂内に置き、二十名の委員を選び、うち十名を常勤させ本部にて会務・布教・義捐金募集などの任に就いた。そして全国に支部を設ける予定にもなっていたようである。この役員については、関東各地の本山貫首をはじめとした、寺院の住職が名を連ねていた。⁽³⁾

また二十五ヶ条の規約「日蓮宗臨時報國義会規約」を設け会を運営していた。この会の趣意として、規約の第一条に「本会ハ今ヤ大日本帝國ガ韓清兩國ニ対スル國家重要ノ大事件アルニ由リ我宗ノ教義ニ遵拠シ立正安國ノ祖教ニ法リ特ニ報國ノ義氣ヲ奮ヒ國民ノ本分ヲ竭サンガ為メ宗内有志縉素ノ団結スルモノナリ」というように宗門が一体となつて報國活動を遂行していくように記されている。

報國義会が組織された同じ頃、日蓮宗からも番外論達が布達された。⁽⁵⁾そしてこの布達も影響してか、全国的に報國義会の活動が展開されるのである。具体的には、まず京都の八本山では、最初この報國義会とは別に組織をつくる計画がもたれていた。しかしこの報國義会の設立を聞き、報國義会発起人として協力することを決め、京都に報國義会第一支部を置き、支部長に本国寺貫主岩村日轟が就任した。そして、一週

間にわたる「戦鬪必勝、兵士健康の祈禱会」を予定し、本国寺において毎日八十名の僧侶が臨席し盛大におこなわれた。一方、このほかの場所には、報國義会の委員が直接おもむいて、講演会をもよおしたり、戦勝祈禱会を執り行い、各地にその支部を作っていたのであった。その結果、明治二十七年八月二十三日までに、京都のほかには大阪・岐阜・岡山・神奈川・福井・栃木・千葉・山形・長野・宮城・青森・広島・新潟・愛媛・和歌山・鳥取・福岡の二府十六県に支部がつくられた。⁽⁶⁾

二

次いで、報國義会が計画した戦争支援活動である、従軍僧の派遣についてみていきたいと思う。

第一回目の従軍僧の派遣は、明治二十七年八月三十日、東京を出発してから、十二月十三日に帰京するまでのものであった。

派遣されたのは、星下妙純寺住職の脇田堯惇と、第一区大檀支林教頭の守本文静である。この脇田堯惇については、後に日蓮宗の高等教育機関として、明治三十七年に専門学校令に基づいて設立された、日蓮宗大学林の設立委員長として大いに活躍し、その後日蓮宗大学第四代学長にも就任した。また、守本文静はいま述べた、日蓮宗大学林の前身であった日

蓮宗の高等教育機関の一つで、池上本門寺内にあった第一区大檀支林の教頭であり、近代日蓮教団の基礎を確立した新居日薩の弟子である。

しかし、この二人の派遣が決まるまでに、自費による朝鮮半島に渡航を報国義会に志願する二人がいた。この二人は共に報国義会の役員であり、また発起人であった日蓮宗の本山小湊誕生寺貫首豊永日良と、日蓮宗本山茂原寺貫首江上勝義である。

このように役員であり、また本山の貫首が自ら従軍僧として渡航を希望していたことから、当時の報国機運の高まりをこのことから知ることができる。

従軍僧の具体的な仕事の内容として、「日蓮宗臨時報国義会規約」第六条「渡韓代表者の服務大要」に示されているように、次の行動が計画された。

首トシテ軍隊ヲ慰問シ其筋ノ許可アル限ハ随意ノ手段ニ由テ軍隊ノ勇氣ヲ鼓舞スル事

居留地皇国人ニ対シ報国ノ義氣ヲ鼓舞シ特ニ宗門ノ信徒ヲ会シ祈禱会ヲ修シ国威顕揚軍隊健康ヲ祈願スル事

兵員ノ死亡ハ戦死ト病死トラ問ハズ特ニ追弔供養ヲ修スル事

但シ可成其筋ノ許可ヲ請ヒ葬儀ニ臨ミ読経回向スベシ

前項ノ外凡ソ国威ヲ揚ケ軍隊ノ保助トナルコトハ便宜事ニ従フベキ事⁽⁷⁾

近代日蓮教団における従軍僧の活動について（安 中）

脇田と守本の行動は明治二十七年八月三十日に東京を発ち、名古屋、京都、大阪、長崎を九月十七日出航、十八日釜山に寄港し、そして領事館と妙覚寺別院を訪問し、妙覚寺別院では、現地の状況を聴いて、翌日同じ船で仁川に向かった。二十日に仁川に到着すると、まず軍隊に従軍を請い、許可を受け平壤の戦地へと赴いた。この間、軍隊に対して日本から携えていた物資を補給をしている。そして目的地の平壤へは九月二十二日出航し船を乗り継いで九月二十六日到着した。その後、司令部を訪問し追悼会の開催の許可、ならびに協力を請い、十月三日に平壤場内において戦死者追悼大法会をおこなった。また戦死者の墓前にまでおもむいて読経、回向し菩提をともらったり負傷者を病院に見舞ったり、活発な活動をしている。その後、十月六日に平壤を出航し、十三日に仁川に戻り「仁川仮教場」にて戦死者の追悼会を行う。二十八日陸路京城へ向かい、十一月十日仁川へ陸路もどり、二十日頃仁川を出航し、二十三日長崎に帰国、十二月十三日、東京に帰京した。⁽⁸⁾

三

次いで第二回目の日蓮宗から派遣となった従軍僧の活動について見ていきたいと思います。明治二十八年二月ころから始まった清への派遣僧侶の選定が本格的になり、三月十日、日蓮

宗務院で行われた「派遣僧侶選定会議」で一回目に続き脇田堯惲、野沢義真（甲府遠光寺）、加藤文雅（東京林昌寺住職）の三名がきまつた。

明治二十八年三月二十八日、一行は東京を発ち途中、静岡、大阪、神戸を経て、広島へと向かった。当時、広島には大本営が置かれ、国内での日清戦争の最前線となっていた。

四月一日、広島の本営へ赴き、そこで日蓮宗管長からの従軍の許可を求める書簡をわたし、翌日にはその許可が下りた。一行の携帯していたものは記録によると「手ぬぐい」一千本、「お守り」一万個、「教義大意」数百部で、身の回りのものも含めると、行李十個、重さでは五十貫であった。しかし、船にのせられるものは、一人一個十貫までという決まりがあり、急ぎよ荷物を詰め替え、当初の予定の七割程度の荷物を携えて行ったということである。

四月四日、広島の子品港を出航した一行は、四月八日、大連に到着、ここで営口行きの船を待つ間、従軍僧としての活動を行っている。

具体的には「兵站病院」を見舞い、日本から持ってきた『教義大意』や「お守り」等を携えながら、病室を慰問した。また、司令部を訪ね戦没者、病死者の墓地において「追悼会」を行う計画を伝え、協力を要請した。そして四月十二日兵士をはじめ従軍者二百名が参拝するなか「追悼会」を行っ

た。この大連という場所は、中継地点であるために、追悼会など、ほとんど行われたことがなかったため、兵士たちの感動を誘ったということである。

その後、追悼会を行うため、旅順に移動するが、この地で臨済宗妙心寺特派の原固庵、西本願寺巡教使木山完生という従軍僧に出会い、戦況や布教状況についての情報交換をおこなったようである。そして旅順での追悼会を四月二十一日に行い、営口へと移動した。

営口は貿易港で人口も多く、盛京省随一の都市で、イギリス・フランス・アメリカからの来訪も多かったようである。そのようなことからフランスのカトリック教会が、会堂を居留地に設け、現地人の貧困層の子供たちを収容し、教育・業務をあたえたり、またイギリスのプロテスタント教会からも、熱心な布教活動が行われていた。

そして、一行もこのような現状を、目の当たりにして、この営口が占領地となったときは遼東半島における布教の中心地として考えていたようである。

営口では軍隊・病院を慰問したり、戦死者・病死者のための追悼会をおこなっていたが、それとともに、町の様子や、そこに生活する人々、現地の宗教事情、日本から訪れている宗教関係者などのことを詳細に調べていたようである。その後、営口から大石橋、海城、牛莊、柞木城、岫巖、大孤山ま

で馬車を用いて、軍隊や付属する病院等を慰問しながら、現地の情報も収集して、移動していた。その後、五月三十一日に大狐山から船で大連に戻り、再び大狐山經由で帰国の途につき、六月九日、広島の子品港に到着した。およそ二ヶ月の従軍僧としての旅であった。⁽¹⁰⁾

この従軍僧の派遣の間に、戦局は変化し、講和会談から休戦状態となり、その後講和条約が締結され、終戦をむかえた。

四

こうして二回の従軍僧の活動みてきたが、第一回目の朝鮮半島で行われた従軍布教は、開戦直後のこともあって、組織的にもまだ整っていない時期での派遣であったため、人選にもてまどり、日蓮宗の正式な派遣ではなく、日蓮宗報国義会という組織からの動きであった。しかし、第二回目の派遣は報国義会を日蓮宗が引き継ぎ、日蓮宗からの正式な活動であった。現地での活動についても、戦局の変化に影響され、また場所の違いがあるが、第一回目の派遣は軍隊の同行であったが、第二回目の派遣に関しては、現地の状況を視察しており、今後、展開されるであろう占領地としての清における布教を見据えての、活動であったことは十分に考えられる。そして、これらの行動は、日清戦争以降に展開される日本の植

民地政策に沿って、日蓮教団の海外への進出も、本格的に行われることを示唆するものであった。

- 1 『日宗新報』五三七号（明治二十七年八月八日）
- 2 中濃教篤著『近代日本の宗教と政治』アポロ社（昭和四十三年九月二十日）
- 3 『日宗新報』五三八号（明治二十七年八月十八日）
- 4 前同
- 5 『日宗新報』五三七号（明治二十七年八月八日）
- 6 前同
- 7 『日宗新報』五三八号（明治二十七年八月十八日）
- 8 第一回の従軍僧の活動については報国義会の活動も含め『日宗新報』五三七号（明治二十七年八月八日）と五五〇号（明治二十八年一月八日）を中心に掲載されている。
- 9 『日宗新報』五五七号（明治二十八年三月十八日）
- 10 第二回の従軍僧の活動については『日宗新報』に「従軍日記」として加藤文雅が九回にわたって寄稿している（『第一回『日宗新報』五五九号（明治二十八年四月八日）・第二回同五六一号（同年四月二十八日）・第三回同五六二号（同年五月八日）・第四回同五六四号（同年五月二十八日）・第五回同五六五号（同年六月八日）・第六回同五六六号（同年六月十八日）・第七回同五六八号（同年七月八日）・第八回同五七〇号（同年七月二十八日）・第九回同五七三号（同年八月二十八日）」。

〈キーワード〉 従軍僧、日蓮教団、日清戦争

（立正大学助手）